

〔日本書紀^三神武〕戊午年十二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時忽然天陰而雨水^{ヒツメ}乃有金色靈鵝、飛來止于皇弓弭。

〔古事記^中景行〕於是詔茲山神者、徒手直取而騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛、爾爲言舉而詔、是化白猪者、其神之使者、雖今不殺、還時將殺而騰坐、於是零大冰雨^{ヒツメ}、打惑倭健命。

〔古事記傳^{二十八}〕大冰雨^{オホヒツメ}遠飛鳥宮段^ヲ○九にも零大冰雨とあり、略○中書紀に大雨甚雨淫雨など、みなひさめと訓り、推古紀、天智紀などに、大雨とあるは、もと大雨とありけむを、後人ヒササメと引る私記なるも同じ、又今世俗に、火の雨なり、抑比佐米とは、もと氷の降るを云て、天武紀に氷零大如桃

子とある是なり、今世に閉字と云物にて、電字これなり、閉字と云は、此字音をハウとあり、阿良禮は、電なるを、古は電なも共に阿良禮と云しなるべし、然るを其より轉りて、尋常の雨の甚く零電字、又右の水零など、ヒササメともヒフルとも訓べし、然るを其より轉りて、尋常の雨の甚く零るをも、云りと見えて、彼遠飛鳥宮段なる氷雨は、歌には阿米とよめり、若電ならむには、阿米と

米と云は、此類の總名にて、此は電なが、又和名抄に、霈をも、比左女と注し、書紀に大雨甚雨など、歌には阿米とよめるにもあるべし、又和名抄に、霈をも、比左女と注し、書紀に大雨甚雨などを、然訓るも是なり、かくて此なるは、打惑とあるを以て見れば、電なり、書紀にも零氷とあり、

〔日本書紀^六垂仁〕五年十月己卯朔、天皇幸來目^ヲ○中略○天皇則寤之語、皇后曰、朕今日夢矣、○中略○大雨從狹穗發而來之濡面、是何祥也。

〔古事記^下允恭〕於是穴穗御子與軍圍大前小前宿禰之家、爾到其門時、零大冰雨、故歌曰、意富麻幣^{オホマヒ}、袁麻幣^ヲ須久泥^{スナ}賀加那斗^{カナト}加宜^{カキ}加久余^{カクヨ}理許泥^{リコシメ}、阿米多知^{アマタチ}夜米^{ヨメ}牟。

〔日本書紀^{十六}武烈〕八年好田獵、走狗試馬出入不時、不避大風甚雨、衣濕而忘百姓之寒。

〔日本書紀^{二十三}推古〕九年五月、天皇居于耳梨行宮、是時火雨^{ヒツメ}○火雨諸本作大雨、河水漂蕩滿于宮庭。

〔類聚名義抄^七雨〕霈^{ヒツメ}蓋切^{カサ}ヒチ、
〔袖中抄^一〕ひちかさ雨。